

木曾地域の高校の将来像を語り合う会 会議録（発言要旨）

令和元年8月30日（金） 午後2時00分

木曾町文化交流センター 大会議室

出席者

同窓会関係者（高校同窓会、木曾の教育を考える会）8名

- 1 開会
- 2 自己紹介
- 3 日程及びねらい
- 4 高校改革～夢に挑戦する学び～ 県教委から説明
- 5 高校の状況について 木曾青峰高等学校、蘇南高等学校からの説明
- 6 意見聴取

○出席者 今、危機を感じているのは、少子化による高校の存続という問題です。

木曾地域の中で、高校が1つになってしまうと、とても困るという思いをしておりますので、ぜひ2校存続を今後もお願いしたい。少子化になってくると、2校存続というのは非常に難しくなってくると思うのですが、例えばその方策として学級定員を考えてもいいと思う。木曾のような山間地では、35人学級、あるいは30人学級の高校をつくってもいいと思います。

それから、普通科志望者は相変わらず多いと思います。ただ、3年前ですか木曾青峰高校の普通科は1学級に減らされてしまったので、今は志望者が少ないという数字が出てきていますが、1学級しかないものですから外へ出てしまう傾向があると思う。郡外へ出てしまう生徒を食いとめるためにも、生徒の希望に沿ったある程度の定員募集というものを考えていかなければいけないと思います。

高度な産業教育を推進する高校に木曾青峰高校が指定校になっている。地域の実情に合った考え方でいくということなので、ぜひ進めていただきたい。

○出席者 普通科が減ってしまったことで、わざわざ郡外まで、電車で通わなければいけない。それが本当に親としてもせつないという声はよく聞きます。

それから資料を見せていただきまして、中学卒業生数が令和15年には、117名になってしまう。これは驚異的な数字です。この数字を見せられると本当に現実は厳しいということは実感します。それを踏まえて、まず中学生の父兄の考え、それが一番大事ではないかと思います。

私は、林業関係にこだわっている場合ではないと思います。必要があればもっと

増やしたっていいんだし、必要がなければなんて言うと思われちゃうんですが、こだわる必要はないと。子供のことを思って考えなければいけないだろうと思います。

○出席者 部活動の視点から見ていくと、現在高校は2校ありますが、それが1校になることによって、1つの部活当たりの部員数は増えることはあると思うんですが、その一方で通学に時間がかかってしまう生徒が多くなり、部活動に取り組みたい生徒たちの部活動の時間が削られてしまうのではないかなと思います。

また、郡内の2校と郡外にはたくさん高校がありますが、通学時間を比べてもさほど変わらないという環境に置かれる生徒が増えてしまうのではないかなと思っていて、郡外へ進学をしてしまう生徒が増えるのかなと思います。

郡内に高校が1校ではなく2校あることによって、それぞれの地域の交流や連携を深めることができ、学校と地域が一体となったまちづくりができていくのではないかなと思います。

○出席者 蘇南高校は長野県の県境にございますけども、大半の子供がJRを頼って通っております。この通学も大雨が降ると列車がすぐストップしたりして、授業にも影響が出ているのが現況ではないかと思っております。

それから、最近隣の岐阜県から通学する子供も増えております。長野県で育った子供たちが、通学とかいろんな不便な環境でも、皆さん平等に長野県で学べる高校をこれから私たちがつくっていく地区だと思っております。

蘇南高校の総合学科が去年10年目を迎えます、ようやく10年たって地元の企業とか住民の方が総合学科のいいところ、難しいところ、キャリア教育の考えているところ、こういうことが少しずつわかってきまして、この取り組みが地域の企業の結びつきを常に頭の中に入れて、先生たちのキャリア教育がやっと実ってきたと思っております。

○出席者 第10通学区は定時制も入れると6つの科があります。選択肢がたくさんあるということは、高校へ進学する際に中学生が、自分で考えて選んで決めるという最初のステップになるという大切なことだろうと思います。

現在の社会を見ますと、あふれるほどの情報があるわけですがけれども、その中で何が正しいのか見分ける力、何が有用なのか選別する力、それを自分の人生に活かしていく力がすごく大切になります。

多様な教育が可能な現在の2校体制を維持しながら、ハードもソフトもさらなる充実を図って、木曾の子供たちがこの先どのように変化していくか不透明な社会に

船出していくための力を身につけるための施策を県教委にはお願いをしたいなと思います。また、そのために郡内町村が一緒になって協力していくことも必要だろうと考えています。

○出席者 先ほどの県から3点についての説明はまさにそのとおりで、キャリアデザイン力、アイデンティティーの資質の育成、創造、体験する時間、まず具体的に総合学科の充実、拡大については、蘇南高校が当てはまるだろうと。現状維持で特定校として、さらに語学研修などが南木曾町のほうからお金をいただいている、そういう部分も十分に考えていただきたいと思います。

木曾青峰高校に理数科があるが人数が少ない。できれば探究科という名称なのかどうかわかりませんが、人数を減らした分を普通科のほうに回らないか。そのためには少人数学級のモデル校としては、学級数の問題でございます。保護者、小中学生からのアンケートによっても、依然として普通科志望が非常に多いということもお願いしたい。

それから産業スペシャル育成、これは森林、インテリア、そういう地域との連携、さらに林大、技専校、看護学校等の連携を深めていただきたい。

○出席者 木曾というのは非常に広いところで、電車で通わないと通えないということだとということを改めて今認識している。大変通うのに苦労している地域です。

地域との連携ということが本当に大事でして、信州木曾看護専門学校ができたおかげで、そこを卒業した子供たちが病院に入るようになって、看護師になれるということになったんですけれども、地域のこともやっていただいて、ぜひすばらしい高校再編計画を改めてお願いをします。

それから、子供たちの数が減ってくるという問題があります。少人数学級にせざるを得ないと思います。少人数学級というのは前にも申し上げたことがあったんですけれども、教育県信州と言っていますから、日本中に誇れるようなモデル校をぜひここにつくっていただきたいと思います。

○出席者 私は2点話をしたいと思います。1つは学びの場の保障ということです。旧第10通学区が当該の中学生の多様なニーズに応える学びの場を提供しているかどうかというと、残念ながら他地区へ流出しているのが現状であると思います。いろんな要因が考えられるんですが、1つは中学生や保護者の要望に応えた学科編成になっていない。もちろん定員のことにもかかわります。

それから、もう一つは普通科と職業科の比率が極めてゆがんでいると。普職が逆転している。そのために、最初から木曾地区での普通科を目指すことなく外へ出る

生徒を生んでいる。また、第1回進路希望調査では普通科と希望してもいても、やむなく職業科に志望変更するか他地区に出ていく傾向があるのではないかと。中学生や保護者の要望に応えた学科編成をお願いしたい。

2つ目は地域と連携した学び、小中学校と連携した学びです。小中の保護者の中には地元の高校を魅力ある学校にしてほしいという声が圧倒的に多い。地元の高校で十分進路実現できるという捉え方はかつてあった。

2人の校長先生のお話の中で、本当によさが知られていないんじゃないかと、ある面ではですね。それが知られば本当にストップがかかるし、もう少し地元のよさを見てくれるのではないかと。やはり私たちが小中高の職員や、地元の住民、それからいろんな皆さんが率直に意見交換を行うことが大事だと思う。

7 意見交換

○出席者 白馬高校の国際科は全国規模募集。今、白馬高校がどんな状況かを教えていただければと思います。

○県教育委員会 白馬高校は平成26年度に、第1期高校再編の一律的な基準に該当して、存続の危機にさらされた中で、もともと地元の白馬・小谷両村では白馬高校に観光系の学科をつくってほしい、そういう願いがあったんです。

ただ、いよいよもう将来像を検討しなければいけないという中で、国際観光科というものを設置してほしいと。ついては全国募集をしてほしい。全国募集するに当たっての主に県外から来る生徒さんたちの白馬での住まいは、村のほうで全部用意するという申し出が地元からあり、国際観光科は平成28年から募集を始めました。

白馬高校の全校生徒数は一昨年度、昨年度と210名とV字回復をして、今年度は5月1日現在で209名です。数字的なことは今持ち合わせの資料がなく私も記憶の中で話をしていますけれども。国際観光科も本年度は初めて40名の定員を満たしたというような状況にあります。

○出席者 みんなで普通科が減ったら困るといって何とかしてもらいたいという声があったけれども、知らない間になくなってしまいました。地元の声を聞いてやってもらいたい。

○出席者 多分学力差がうんと広がっているのではないかと、そうなると、義務でも習熟度別とかそういうのを導入してきたんだけど、多分、以前は、国公立大学入学の割合が松本県ヶ丘同等ぐらいではなかったかと思う。人数に対しての割合がね。今の子供たちが要するに普職並列というようなことが言われて、今の子供たちの様子で習熟度などは導入していくのかな。高校も御苦労だなと。その辺をお話し

ください。

○出席者 先ほど私は経験上基礎学力に対してかなり断片的な話をしたんですが、両校長先生からお答えいただきたいのですが、今の木曾の中学卒業生に高校が求める、本来こうあればいいという、このくらいの力を持ってほしい力について、そういう点では乖離しているのではないかということをお臆測でさっき物を言ったんです。

ただ、地域高校ですから、多様な生徒を引き受けなければならないという、そういう社会的責務もあると思うんですが、そういう点では先ほど習熟度も出たんですが、どうするかは高校側のやり方なんですけれども、どのような工夫をしているのか率直なところを聞かせていただきたいと思います。

○木曾青峰高校 苦しいところを利点にして、学校全体を元気づけていかなければいけないという考え方があって、正直ですね、先生たちはこれだけの学力の幅があって大変な思いを持っております。以前に比べてこれだけ幅が広がっている。

それから、今まで普通科に入っていた子供たちが理数科にも入っていつているので、当然理数科の中でも今までに比べて学力は落ちているというか、たくさんの生徒の面倒を見なければいけないので、一律の方法で以前みたいに理数科の生徒だけにある意味進学指導していればいい時代ではなくなっているなという部分があります。

習熟度という言い方をしていませんけれども、例えばクラスを2つに分けて、英語とか数学を学ぶ。例えば場合によっては3つに分けてというようなことも普通にやっている。そういう意味では、少人数にして教えることで、より勉強の幅、学力の幅に対応するというので、先生たちは頑張っていますが、全体としてはどうしても落ちているでしょうね。

○蘇南高校 学力幅は、これは昔からありました。私も高校へ入ったときには英語と数学は習熟度でありました。現在も本校は英語と数学においては習熟度ということをやっています。私がいたときには2段階の習熟度ですけど、今は英語は4段階、数学は3段階の習熟度でやっています。

基礎学力のない生徒が多くなってきたというのは、これは木曾谷だけではなくて都市部もそうだと思うんです。上と下の幅がうんと広がっています。それは最近よく言われている経済格差がそのまま教育格差にもあらわれているという、そういう面はこの地域も当てはまるのではないかと思います。

ただ、そういう子たちも高校というところは社会への出口になりますので、何とか生活できる、そういう力をつけなければならないと。ではどうしているかという

と、もう基本本校は個別指導です。80人募集していますけれど、80人入ってきていないという現状の中で、それを逆手にとった少人数教育を行っています。今は就職のほうの指導で夜8時まで、もうほとんど担任だけではなくて全ての職員が勉強を見ているそんな状況です。

○出席者 中学生の子供たちはクラブ活動を小中学校一生懸命やって、高校へ行ってさらに高い部活をしたいということで、そんな感じで選んでいく子供も多い。学校の先生方のいろんな就業時間がこれから規制されますので、放課後クラブ活動を総合型スポーツクラブでいろんな面を見て、子供たちがいろんな選択ができて、近くの学校に行けるようなことをしていきたいと思います。

○木曽青峰高校 とかく進学とか、そういうことばかり目が向けられがちなんですけれども、私は実際に北部の保護者の方々と地区懇談会という形でずっと話してきて、流出しているもう1つの大きな理由が部活で、特に私立高校の強いところに、例えば開田とか王滝からも昔から流れていたんですね。部活というものが本当に何といふかな、小さくなっていった維持できなくなって、大きなファクターだと感じています。

○蘇南高校 自主的な活動といっても、人数そのものがないと厳しいと思いますので、どうしても人数が足りないと合同チームということになるんですが、例えば蘇南と青峰が合同チームをつくらうと思っても、どちらか片方が、例えば野球だったら9人、サッカーだったら11人満たしていると合同チームがつかれない。高体連だとか高野連だとか、そういうところの規定を見直して、木曽地域でオール木曽というような形で部活動をやっていくような形にしていかないと、できないから外に行くという、そういうのはすごく増えてしまうのではないかなというのが私の感想です。

○出席者 蘇南高校で岐阜県から通っている生徒の数とか、教えていただきたい。

○蘇南高校 例えば令和元年郡外4名です。今年の場合は、これはバドミントンで下宿で伊那とか諏訪から来ている人たちです。それから郡外、多くはバドミントンですが、全員がバドミントンというわけではありません。塩尻から通ってきた子もいました。

それから県外というのが、これがもう全て中津川市になります。ただし、中津川市といいましても、隣の旧山口村ですね。山口村の時代に通っていた親の息子、娘が親が蘇南に行ったからということで。昔から岐阜県から入ってくるというのはありましたので、一定数は今後も来てくれるのではないかと考えています。

○出席者 こちらから中津川に出て行っているのは。

○蘇南高校 入ってくる人数よりは少ないです。今年で言うと9人。

○木曾青峰高校 今回の未来の学校の計画書の、私は郡外募集を使っているんです。なぜそれを全国募集しないのかというと、白馬は村で全部その子たちの生活、住居も、それを担ってくれているので。

今でも我が校の寮母さんの確保に苦労しているので、そんなに簡単に例えば建物がもしあったとしても、そういうものの手当が学校のほうで見通しが立たないんです。

私が白馬高校の校長と話したときに、一番びっくりしたのは、寮。それプラス学習塾を用意した。それがスタンダードですよと言われたので、じゃあこの地域でそれがすぐにできるのかという疑問符が大きくあるので、この部分について私は話をしていなかったというのがあります。

○出席者 南木曾はそれに近いようなことをやっているんじゃないか。蘇南高校のために南木曾町単独でお金を出していただいて、同窓会経由で支援を行っていますけれども、これが蘇南高校の場合。2校を存続していくために、地元町村が手を差し伸べないとやっていけないよということになったときに、町村長さんたちの覚悟も必要ですし、住民の皆さんの賛同も必要になるかなというときがもしかしたら来るかもしれない。

○出席者 木曾は木曾なりの事情がありますので、ぜひ木曾の事情をわかっていただいて、いろいろ住民の声を聞きながらやっていっていただきたい。具体的にはさっき言った普通科の問題もありますが、例えば少人数学級で1学級の定員を30人ずつにして、その分普通科を2クラスつくとか、そんなようないろいろな選択肢を検討していただいて、何とか木曾は木曾として高校が充実していけるような、検討もお考えいただければとお願いしたいと思います。

○出席者 1つ高校にお願いします。私たち木曾町民は蘇南高校のことを知らな過ぎる。実際の学校の運営とか知らせてもらったほうがいいということが1つ。もう一つ中学校との関係というのがあると思うんですけれども、教えてください。

○蘇南高校 南木曾町の場合には、小学校、中学校、高校、1校ずつとなっていますので、そこにさらに保育園も入れて、保小中高の連携というものは、例えば職員の交流、それから研修を今は年に2回ですかね。そこで顔を合わせて、どんな人がまわっているかというところから始めています。

それから、春の研修は、できるだけ教科ごとに集まって小中高の悩みですね、特

に今は小学校なんかは英語教育が入ってきて、非常に小学校の先生方が戦々恐々としている。だったら中学、高校の専門の教諭がそこにお手伝いに行くことだってできないわけじゃないと思います。そういう連携は、ほかの地域に比べれば南木曾町の教育委員会を中心にできているのかなと。

○木曾青峰高校 明確な連携にはならないと感じていて、インテリアの子たちがよくものづくりで地域に出て行って、いろいろ子供たちに教えているのはあります。それから、学習補助で、うちの生徒が木曾町の中学校とかに行っていることもあります。以前、その話をしたら、木曾町の小学校の校長先生が小学校に来てくれと。いずれはそういう交流もしていきましょうみたいな部分の確認はしているんですが、いずれにしましても、そのような例が1本、2本あるだけで、本当の意味で小中高でどういうことができるかということも含めての大きな計画づくりは進んでいないと。

○出席者 町村のお金を高校の存続なり、特色あるものに拠出していくことに関しては、私は慎重でなきゃいけないという立場です。市町村立の義務の学校でなく県立高校です。先ほども言ったように、中山間地においても、都市部においても、やはり公平にほぼ同じような教育を受ける権利もあるし、また県の教育行政としてはそうしなきゃいけない。本来は高校生になったときに、どこに行っても少なくとも最低こういう教育は保障されるということが私は公教育の原則だと思います。

○出席者 電車で通う子供たちがいるんですね。通う時間が学校のいろんな授業だとか、運動だとか、その部分に時間によって左右される。定時なんかは御飯を食べる時間もとっていないとか、そういう問題があるので、これ幾ら言っても動かないですね、JRというのは。しかし、何とかこれは動かしてもらわないと困るわけで、県としても考えていただいて、学生くらいは都合のいいような、通えるようにしてほしい。

8 閉会